

「一 はじめに」 (pp.83-84)

- ・音楽は言語のように概念的意味を伝達しない。
- ・しかし、われわれは音楽に何らかの意味が存在していることを直観的に感じている。
- ・「意味」を介して、音楽と言語という異なったメディアに共通する側面を明らかにすることには意義がある。
- ・〈両者の共通する側面〉としての意味作用が成立するには、いかなる条件が必要となるのだろうか。
- ・このような「条件」は、しかし、言語メディアに〈指示的意味が内在する〉といった、いわば固定観念を出発点としては検討できない。
- ・意味作用の成立自体を再検討するために、ここで渡辺が着目するのが、言語や音楽を包摂するコミュニケーションという現象である。
- ・そして今回の検討において、渡辺が援用するのが言語学における語用論である。
- ・なぜ語用論かとなれば、それが言語の意味作用を、言語の構造のみならず、コミュニケーション行為の側面で捉える視点であるからだ。
- ・語用論を援用しながら渡辺が本論で明らかにすることを試みるのは以下2点である。
- ・一つは、音楽を「作曲家と聴き手とに成立する意図的コミュニケーション」とする見地から、音楽にも「言語の場合と全く同様に意味作用が成立すること」(p.84)である。
- ・もう一つは、音楽が「作品として聴き手に呈示される限りにおいて」、意味作用の成立の点で「一つの特異なあり方を示していること」(同前)である。

「二 発話者の意図とその了解」

「二 - 一 『意図』の複合的構造 -- P・グライスの“Meaning” -- 」

(pp.85-87)

※ 渡辺は、ここでの自らの考察の先行研究例として、言語学者ポール・グライスの研究を取り上げる。

- ・彼の論文 “Meaning” (1957) は、〈語が用いられる状況を手がかりに〉、発話の意味作用の成立条件を、発話者の意図との関連で考察した。
- ・グライスは、動詞「意味する」を取り上げて、その語が用いられるケースを二つに区分する。
- ・一つは、〈発話者が意図的に発した記号が何かを意味する〉のように、動詞「意味する」が使用されるケースである（「非自然的意味」）。
- ・もう一つは、〈意図を伴わないある事態が何かを意味する〉のように、動詞「意味する」が使用されるケースである（「自然的意味」）。
- ・グライ스가ここで試みるのは、発話された語が「非自然的意味」としての「意味をもつ」ための条件を明らかにすることであった。
- ・語の使用例の検討を通じて、発話者の意図には2種類あることを示しながら、グライスはおよそ以下のように結論する。
- ・つまり、「非自然的意味」が生ずる語の使用状況には〈受け手に何か具体的内容を了解させようとする発話者の意図〉（「第一の意図」）と、それのみならず、〈発話の意図性の存在を受け手に了解させようとする発話者に意図〉（「第二の意図」）という二つの意図が存在し、「第二の意図は、第一の意図の内容いかににかかわらず、およそ『意味』が成立するために決して欠くことのできない、より根源的な意図として、あらゆるコミュニケーションの土台を作っている」(p.87) とのべ、「非自然的意味」の成立条件を指摘したのである。
- ・グライスの研究は、記号における意味生成の本質を、言語メディアのみならず、音楽メディアを含む、多様なコミュニケーション形態に共通する基本的な構造として規定することを企図したものである。この点で、渡辺は自身の考察に大きな展望をもたらす先行例と捉えている。